

## 資料について

### 「私の歩んで来た道」

紀要第1号及び第2号にひきつづいて、本号では、初代学長藤村トヨ女史の自叙伝ともいべき「私の歩んで来た道」全文を収録した。

これは、『学校体育』（日本体育社）第8号（昭和28年9月）から12号（同年12月）にかけて、5回にわたって連載されたものである。女史の自伝的随想は他にもいくつか散見できるのであるが、これが最も首尾一貫しており、しかも戦後の数少ない発言の一つであるという点で、資料的にも比較的高い価値をもつものと思われる。特に、この論文を発表された約1ヵ年後に急逝されているところから、ある意味では、「遺稿」としての地位をもつものとも考えられる。

ここでは、体育に志した動機をはじめ、全国的な体育視察から西欧への視察旅行、或はドイツ体操の受容などについて、簡明率直にしかも興味深く語られているが、その行間から窺みとられるものは、何よりも、育体の真髓を、とりわけ日本の女子体育の本質を把握し生成しようと、常に体験的に努力をつみ重ねていく女史の気魄であろう。また、律動運動への忠言と衣服改良の独創的発言なども、こうした女史の「脚下照顧」の姿勢において改めて見直され、味読さるべき見解として注目されよう。

この論文の草稿は、現在本学の資料室に保管されているが、収録にあたって、雑誌論文の読みにくいところに最少限の手を加え（句読点など）、他はそのままにとどめておくことにした。

（上沼八郎）

### 女子体育専攻学生の体格、運動能力の測定結果

この資料は、昭和37年から昭和41年までの5年間における、東京女子体育および東京女子体育短期大学学生の体格と運動能力の測定結果をまとめたものである。

この種の資料は、それ自体としては普遍性、客観性に乏しいが、同種のいくつかの資料をまとめた、あるいは長い年月を通して観察する時は、極めて貴重な資料となるであろう。この資料は、わが国青年女子の体格や運動能力の現状や推移を、総括的、継続的にしらべようとする人のために提供するものである。したがって、現代よりもむしろ後世においてその真価が発揮されると信じ、記録に残すものである。

資料の内容、方法等については、本紀要（第3号）の川口道子「本学における測定実施報告」に詳しく記載してあるので参照されたい。

（和泉貞男）